語りが持つ二つの意味――社会的な語りと個人的な語り――

私は、東日本大震災発生からちょうど半年後、NHKクローアップ現代「あの時何が？巨大津波石巻大川小の悲劇」で次のように発言しました。

まず事実を一つひとつ集めること。すべての事実が集まるわけではないし、食い違いもあると思うんだけれども、できるだけたくさんの事実を集めて、そしてきちんと検証をして、そして、どこが間違っていたのかということを明るみに出すことだと思うんですよね。
その事実をできるだけ一つひとつ集めてきちんと知ること、子どもが最後どう生きていて、そしてどう津波に巻き込まれたか、それを知ることが子どもの生を見つめることになり、そしてとてもつらいですけれども、子どもの死を見つめることになると思うんですね。

この発言には二つの意味が含まれています。
行政や防災の専門家、マスコミ、未災地にいる人々は、社会の防災力の向上につながる語りを期待します。被災者が語る体験談には、災害の知識の不足と不十分な備え、発生時の対応の拙さなどが含まれており、その事実から得られた教訓を活用して社会の防災力を高め、次の災害で被害を減らそうとするわけです。「同じ過ちを繰り返さない」という言葉は、災害の後、必ずといっていいほど防災関係者が口にする言葉です。
大川小学校を語り継ぐことは、「同じ過ちを繰り返さない」ために必要なのです。

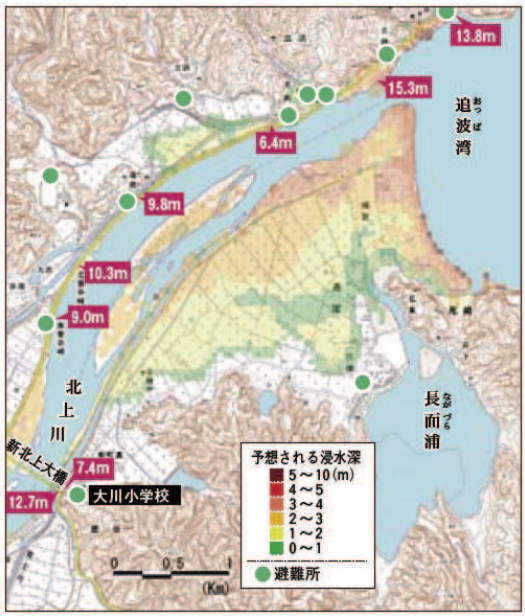
でも、大川小学校は社会の防災力を高めるための道具ではありません。私はもっと個人的な語りがあると思うのです。
阪神・淡路大震災の被災地で、語り部を続ける女性はこう言います。
自分は、小学生で亡くなった娘がかわいそうだ、いろいろとやりたいことがあったろうに、それが突然奪い去られてかわいそうだと語ってきました。でも、10年経ってふと思ったんです。私が語りたかったのは、娘を亡くした私がかわいそうだということだったんだと。

辛い体験をした人はその体験を語ることで災害と向き合い、その意味を考え、心の中に飲み込んでいこうとするのではないでしょうか。しかもそれは時間のかかる作業です。しかし、この過程こそが、被災者が災害体験を語る最も大切な意味だと思います。
個人的な語りこそが災害の真実を伝えます。その苦痛に満ちた作業は社会の防災力の向上ではなく、まず自分のためにあるのです。
私たちはそのことを忘れてはならないと思います。

諏訪　清二
兵庫県立松陽高等学校

大川小学校で起きたことから科学者が学ぶべきこと

大川小学校で多数の児童・教職員が死亡・行方不明となった要因に関して事故検証委員会報告書（以下、報告書）は「避難開始に関する意思決定の時期が遅かったこと、及びその時期の避難であるにもかかわらず避難先として同校より標高は高いものの河川堤防に近い三角地帯を選択したことが、最大の直接的な要因である」と結論づけた。そして、その遅れの分析結果のひとつとして「過去に津波が来襲した記録がないことに加え、大川小学校がハザードマップの予想浸水域外になっており、津波災害時の指定避難所になっている」点が影響したと推定した。



石巻市の当時の津波ハザードマップは、宮城県防災会議地震対策等専門部会が04年に連動型宮城県沖地震を想定して作成したものをほぼそのまま踏襲していた。図の中でいろいろな色で塗りつぶされた部分が、想定地震による津波浸水が予想されている領域である。こげ茶色の5m以上から緑色の1m未満まで６段階で表されており、左下の大川小学校はこの領域から外れているだけでなく、それをもって津波災害時の避難所に指定されてしまっていることが見て取れる。

また、1933年の昭和三陸津波の浸水域も大川小学校には及んでいない。この大津波を上回るものとして知られている1896年の明治三陸津波では図面は残っていないものの、宮城県海嘯誌という公文書に「大川村は追波の河口に臨み又其湾に面し居るも沿海民家少なかりしを以て流失家屋僅かに一戸死亡亦一人に止まれり」（大川村は当時の河岸南側の名称）と書かれている。これだけでは大川小学校に明治三陸津波が及ばなかったとは言い切れないが「大川村大字長面は海岸には凡十町餘の距離あるを以て市街地付近に於ては何等の被害なかりし」（十町は約1km）の記述と併せると報告書の通り「過去に津波が来襲した記録がない」となろう。

図で示した東日本大震災時の津波の浸水高と比較すると、ハザードマップの推定がいかに過小評価かよくわかるが、ここに科学に関わる問題が潜んでいる。ハザードマップが作られた前述の地震対策等専門部会による第三次地震被害想定では、国の地震調査委員会が発生確率の長期評価を発表していた地震のうち、もっとも確率が高く規模が大きい、マグニチュード（M）8連動型宮城県沖地震が想定地震として採用された。採用にあたっては、専門部会に参加していた数名の科学者も、科学的に妥当だと判断して同意したはずである。

ところが実際に地震が起こってみればマグニチュード（M）9の超巨大地震で、予想を絶する巨大津波となってしまったのである。直後に当時の阿部勝征・地震調査委員長が「4つの想定域が連動するとは想定できなかった。地震研究の限界だ」（正しくは4つではなく6つ）と述べたように、過小評価のハザードマップの背後には科学の想定外があった。地震の科学は依然として経験科学の域を出ず、東日本大地震災のような未経験の事象を事前に想定することは困難な状況にある。

では科学者はどうしたらいいのか？　報告書にはピント外れな提言しか書かれていない。未経験の地震を事前に想定してハザードマップを作成するという課題は、科学の「限界」への挑戦とも言える重い課題であり、その解決には長い道のりが必要である。しかし、地震国日本は、それでも地震災害の軽減のためにハザードマップを作らなければならないという状況にある。

そうした状況の中で科学者はどうすべきなのか。たとえば、科学者の常識的な感覚から導かれる平均的な想定地震だけでなく、情報・知見などを総動員して最大規模の地震を想定し、それを提示する必要があるだろう。東日本大震災以前のM8連動型宮城県沖地震は規模が大きなものとして選ばれたのであろうが、結果的に「平均的」な想定地震に過ぎなかった。今後必要となるのは、未経験な状態で東日本大震災のような「最大規模」の地震を想定することである。

そして、「平均的」や「最大規模」など、複数の想定地震ごとに提示されるハザードマップの中からどれを選ぶ　か、あるいはどう組み合わせるかなど、減災に向けた活用の仕方は科学者が決めるべきことではない。行政あるいは住民が直接、科学以外の要素（経済的・社会的状況など）も勘案して決めるべきことである。特に、避難所や避難場所の選定はそれ自体が重大であるだけでなく、大川小や、ここでは触れなかったが東松島・野蒜小の場合のように人々の避難行動に大きな心理的影響を与えるから、慎重な決断が必要である。（FACTA 2014年5月号の拙文から抜粋しました）

纐纈　一起
東京大学地震研究所・教授

大川小事故とその検証に学ぶ

2011年の東日本大震災から4年が経過した。しかし、石巻市立大川小学校での被災原因の「検証」と「共有」はまだ途上にある。誰のため何のための学校、検証なのだろうか。

2011年2月の大川小事故検証委員会報告書提出後、毎月のように地球惑星科学、理科教育、災害復興、科学技術社会論の学会や研究会、教員研修の場で、検証の問題点について話題提供し、参加者と意見交換を続けてきた。大学の授業やゼミでも学生たちとの議論がある。それらのなかで何度も耳にしたのが、「事故原因の検証はむずかしい問題ですね」という指摘である。

大川小事故検証委員会の報告書案を取りあげた2013年1月29日公開の高木克聡署名による産経新聞ネット記事「【大川小最終報告書案】遺族の「なぜ」に答えず」では、検証委側の主張を要約するかたちで、「事実を積み上げる科学的な方法による検証では、遺族の思いに応えることはできなかった」と論評している。しかし、学校が4階建てでなかったこと、裏山に階段がなかったことなどを事故原因とする検証委報告の24の提言が、大川小の事実に即し科学的に導き出された結論・教訓ではないというのも、少し考えれば誰にでもわかるだろう。検証委が科学的だったわけではない。

問題は、何が検証をむずかしくしているのかにあるのではないだろうか。どんなに調べても確認できない事項もあるだろう。したがって、調べられる事項を徹底的に調べながら、学校現場におこりうる原因を推定していく仮説・検証という科学的な方法論が不可欠だ。その際には、事故に至るありそうな（可能性が高い）過程を決して見落とさないよう心がけるのが肝心だ。

とっさの判断で避難が間に合ったほかの多くの学校でも、逆にいえば決断の遅れによって事故が生じていたかもしれない。避難に成功した学校で生じた判断、決断に至る際の逡巡は、大川小の教員集団でも生じた可能性が高い。多くの学校で生じうる判断、逡巡、決断の過程からは、再発防止のための教訓が導き出せる。これを見落としてはならないはずだが、検証がされなかった。

大川小事故検証委員会は、直接の証言にもとづく、推測を交えない原因を導き出そうとした。しかし、証言が得られず、「分からないものは、これ以上分からないと結論づけた」（室崎委員長：上記産経新聞記事から）。証言が得られなかったのは、大川小事故検証委員会の方針に問題があったからだと考えられる。大川小事故検証委員会は、聞き取り調査の際に、公的な立場の発言者であってもすべて匿名とした。その結果だろう、「忘れました。覚えていません」などと当初の証言を否定したり、あいまいにしたりした石巻市教育委員会関係者が続出している（名取市の東日本大震災検証委員会が、役職の重みよりもプライバシーへの配慮が証言を得る上でより重たいときに匿名とするといった基準を示していたのと大川小検証委の方針は対照的であった）。

つまり、（1）大川小の事実に即し検証・再発防止を図る方針、（2）匿名化・免責論以前に、組織トップに説明責任を求める姿勢、（3）自らの方法論の限界を自覚し、見落としを避けようとする科学的態度、この三つさえ忘れられなければ、より豊かな検証が実現したのではないだろうか。

誰のため何のための教員集団なのか、根本目的に立ち返り児童の命のためにベストを尽くす議論ができていれば、山への避難の判断は、逡巡を乗り越え、決断され、実現しただろう。それだけの知見は大川小の教員集団に備わっていたのだから。大川小事故検証委員会もまた、根本目的の共有から失敗してしまっているように思えてならない。

林 衛
富山大学人間発達科学部

いつかの年の桜

桜がきれいに咲きました
新学期はあたらしいときめき
胸には新しい名札
ランドセルに
新しい教科書
校庭に走っていく
子どもたちの姿
舞い降りる小さな花びら
ほほえむように

問われているのは学校であり、教育行政であり、専門家である

学校での重大事故・事件や災害で我が子をなくしたり、重い傷を負って暮らすことになった我が子のいる親たちは、私の知る限り、ほぼ間違いなく自分を責める。

特に我が子を亡くした遺族の場合「なぜあのとき、我が子を学校に送り出したのか？」「どうしてあの時、我が子の思いに気づいてあげられなかったのか？」という思いや、あるいは「亡くなった我が子に対して、生きている私には今、何ができるのか？」という思いを抱く方も多い。そして遺族のなかには、深い苦しみと悲しみの縁から「二度と亡くなった我が子のような苦しみを、他の子どもには味わってほしくない」と強く願い、そこから立ち上がり、再発防止策の徹底した実施と、その前提となる事実経過の検証を強く学校や教育行政に要望する方も現れることになる。

ところが遺族たちが深い苦しみ、悲しみの縁からこのような要望を紡ぎだすまでの間、学校や教育行政は何をしているのか。私が見聞きしてきた多くの学校での重大事故・事件のケースでは、「一日も早い学校再開を」「平常の授業の秩序を取り戻すことを」という周囲の声に押されるかのように、なによりも最優先するかのような事後対応が行われてきた。それはまるで「起きてしまった悲しい出来事」が「なかったこと」のように、学校が「平常」に戻ることが最優先されているかのようである。

しかし、遺族たちは絶対にかつてのような「平常」に戻ることができない。なぜなら、そこには我が子が居ないからである。だからこそ遺族は、「一日も早い学校再開を」という声に押されるかのような事後対応に対して、強い憤りと疑問を抱くのである。あるいは、亡くなった我が子が存在しなかったかのように扱われ、我が子の記憶が風化していくことに危機感を覚えるのである。そしてくり返しになるが、記憶の風化を防ぎ、再発防止策の徹底した実施のためにも、事実経過の検証を強く学校や教育行政に求めていくことになるのである。

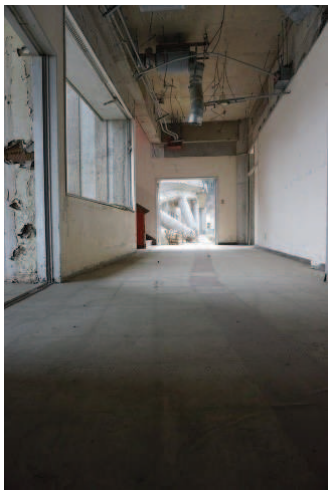
とすれば、このような遺族あるいは被害者家族の強い願い、思いにどこまで寄り添って対応していくことができるのか。それが今後、重大事故・事件や災害発生時における学校・教育行政側の事後対応や、事実経過の検証や再発防止策の検討・実施における諸領域の専門家等の基本的な姿勢として求められるのではなかろうか。

今、子どもが亡くなったり、重い後遺症に苦しむような重大事故・事件や災害において、そのあり方が問われているのは学校であり、教育行政であり、私を含む専門家の側である。そして亡くなった子どもの名誉を傷つけたり、遺族や被害者家族、そして被害体験とともに暮らす子どもにより辛い思いをさせるような事後対応は、今後、くり返してはならない。

住友　剛　京都精華大学人文学部教授

名前を呼べば
返事してくれそうだ

返事しているよ
聞こえないだけ



日常的な職場風土としての「対話」。
すべての人に必要な、肩書を超えた「リーダーシップ」。
その二つが、2011年の大川小学校の職員室に存在すれば、
適切な「合意形成」がなされたのではないか。

大川小学校でお子様を亡くされた方々は、
亡くなった子どもたちの思い出を取り戻したいという感情論で
戦っているのではない。

ましてや、誰か特定の人を糾弾したいということでもない。

この停滞した社会の中で、普遍的にどこにでも存在してしまっている、
「前例踏襲主義」「お任せ民主主義」の大人の思考停止状態に、
そんなのもうやめよう、みんな自分の頭で常日頃から考えようよと、
訴えていらっしゃるように、私には見える。

はじめて大川小学校の、あの日の話を聞いたとき、
実は私も、「未曾有の震災で起きたこと。ツラい責任追及はもうやめて・・」と、感じていた。
しかし今は、ちいさな命が失われた「原因」を、
社会の学びに変えなければいけないと、心から感じている。
その責任が、すべての大人たちに課せられた、子どもたちからの宿題だと思う。

今村　久美
認定特定非営利活動法人カタリバ　代表理事

いかなる想定外でも失ってはならないもの

2010年4月末、当時私が勤務していた東京大学地震研究所に、気仙沼市の中学校から5名の少年少女がやってきた．修学旅行で東京を訪れたので、地震と津波の話を聞かせて欲しいという．ひと通りの説明をして、地震が起きたら高いところね、などと伝えてレクチャーを終えた．
そのたった10ヶ月後、テレビに映し出された三陸の惨状に私は言葉を失った．彼らの町は巨大津波に飲まれ、跡形も無い更地となっていた．見学に来た中学生の名前をインターネットで検索しながら、自問を繰り返した．私は、いつか君たちが津波にあった時に絶対に生き延びられるように、と思って講義をしただろうか．結局私だって、巨大津波が来襲することを現実的に考えていなかったのではないか．救えたはずの命を、そのチャンスを、あまりに軽率に扱っていたのではないか．自分の不甲斐なさに愕然とした．
1995年に阪神・淡路大震災が起きた時、私は高校1年生だった．テレビで見た惨状に、こんなこと二度とあってはならないと地震学者を志した．同じ年頃の子がパジャマ姿のままで瓦礫に向かって母を呼び続ける姿と、母の手料理を食べている自分—．高校生なりに責任を感じたのだと思う．

2011年3月、既に地震学者として研究や啓発活動を行ってきた私は、東北のこの惨状にいったいどれほどの責任を負えばいいのだろう．震災直後、5名の少年少女を想うだけで逃げ出したい気持ちになっていた自分に気づいて愕然とした．向き合わねば．どんな現実が起きていたとしても、自分がしてしまったことに向き合わねば．

今も考える．もしも私が、震災の10ヶ月前に修学旅行生に津波のレクチャーをした立場ではなく、被災地の学校教員だったらどうだっただろう？津波が想定されていなかった地域の学校教員で、目の前に子供たちがいたら、私はちゃんと高台に誘導できただろうか．もう少し情報を集めてから最善の判断をしよう、という理由をつけて、その場にとどまったりしなかっただろうか．高台避難という判断を、他の教員に笑われるのではないかと躊躇したりしなかっただろうか．そして、こう感じることは私個人の強さ弱さだけの問題なのだろうか．
こんな経験をした私たちが、未来へ向けてできること．それは、「いかなる想定外でも失ってはならないものは何か」をみんなで話し合い、共有することだ．家族の命、子供たちの命、あなた自身のいのち．この基準をみんなが持てば、その時々で最良の選択ができるだろう．
小さな命たちが教えてくれた自分の弱さと、それをみんなで補い合って、大切な命を守るための方法．もう決して犠牲にしない．

大木　聖子
慶應義塾大学環境情報学部准教授

おぼえていてくれたら

田んぼの苗が　きれいに並んで
そよ風にゆれる頃
運動会の練習がはじまる

応援合戦で
赤組の団長は白い牛乳を
白組の団長はトマトジュースを
一気に飲み干す
おきまりのパフォーマンス

大歓声の中　かけぬけてゆく子どもたち

綱引きが始まると
おばさんが飛び出して　声援を
ソーランのかけ声　元気よく
アンコールもあったりして
子どもも　大人も　先生もみんな笑顔

青い空、緑の山、万国旗…

毎年ここで
そんな運動会があったことを
おぼえていてくれたらいいな